

ペDESTリアンデッキをともなう鉄道駅の空間構成手法

埼玉大学 学生会員 渡邊大吾*
 埼玉大学 正会員 窪田陽一*
 埼玉大学 正会員 深堀清隆*

1.はじめに

今日日本の鉄道駅に見られるペDESTリアンデッキ（以下デッキ）は、歩車分離を行い、効率的に交通を処理するためにバスバースやタクシーバースなどの交通空間上にだけデッキが設置される場合が多く、必ずしも歩行者にとって利用しやすい駅空間とはなっていない。そこで本研究ではそのデッキをともなう駅空間の現状を考察し、さらにデッキの特性を生かした空間構成を模索する。

2.デッキの現況とデッキの有効性

日本の既存の駅に見られるデッキを分類し、その問題を評価するため、文献・図面により国内の事例を収集する他、首都圏における44駅の54デッキについて現地調査を行った。そしてデッキとそれに接続される商業施設の配置形態・周辺街路を構成要素として取り上げ、それぞれをパターン化した。デッキは形態に着目し、単線型・複線型・ループ型・面型の4パターン（図1）、商業施設の配置は前面型・両サイド型・サイド+前面型・駅ビル型・遠隔型の5パターン（図2）、周辺街路は駅前広場に接続される街路の数などに着目して5パターン（図3は一例）に分類を行った。そして各要素を組み合せ、その中で計画上想定し得る63パターンについて歩行者の動線および視覚的観点より評価を行った。

図4の構成例は街路パターンと前面+サイドの商業施設配置とループ型デッキの組み合わせである。動線に関しては、ループ型デッキにより歩行者の動線が分散され、動線の錯綜が避けられる。視覚的観点からはループ型デッキにより駅前広場に回遊性が生まれる。またサイドの商業施設に比べ前面の商業施設のほうに視線が行きやすく、デッキによる視覚的誘導効果が得られる。

このようにそれぞれの組み合わせについて考察を行った結果、デッキの上と下で空間が分離され、異なった空間利用が可能となる。デッキ上からはデッキ下を見渡すことが可能となり、デッキ下の状況を把握しやすく、目的地までの円滑な利用が可能となる。デッキは歩行空間を制限するため、デッキによって歩行者は誘導されやすくなるといったデッキの有効性があげられる。

図1. デッキの分類

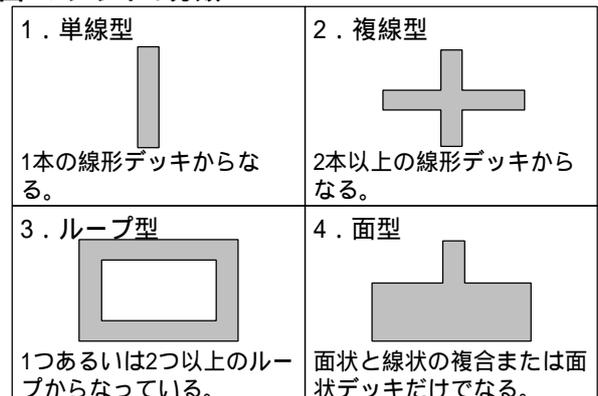


図2. 商業施設の配置パターン

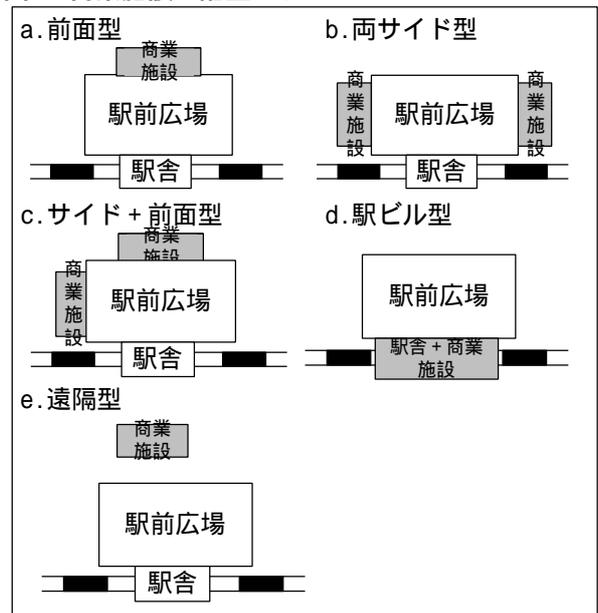
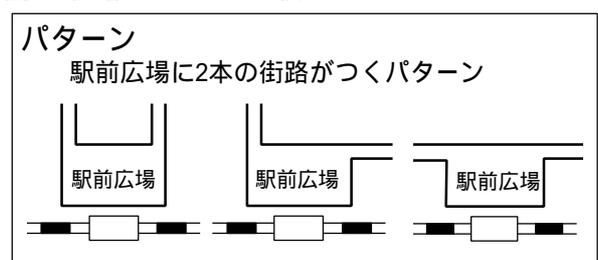


図3. 街路パターンの一例



キーワード…ペDESTリアンデッキ、駅前広場

* 連絡先（埼玉大学大学院理工学研究科 埼玉県さいたま市下大久保 255 tel 048 - 858 - 3013）

3. デッキの有効性をいかした駅の空間構成

次に今日見られるようにデッキを交通空間上にだけ設置するのではなく、デッキを用いたより有効な駅空間の立体的構成を模索するため、デッキをともなう駅空間において、ホーム・交通空間（末端交通の乗り継ぎを行う空間）・滞留空間（商業施設やカフェなどが滞留するための空間）・デッキを構成要素として、それらを様々に組み合わせた各パターンに対し、歩行者動線の滞留空間における滞留者との交錯、デッキからの視認性、外部との連続性などについて考察を行った。

現状の一般的な構成パターン（図5 構成例1）はホームに向かう歩行者と滞留者が滞留空間内で交錯してしまうしかし滞留空間上にデッキを設置するパターン（図5 構成例2）は、歩行者と滞留者の交錯を回避し、デッキ上から駅に付随する様々な機能要素（改札、プラットフォームなど）への視認性が高く、駅の空間構造を容易に把握できるため歩行者の円滑な移動が期待できる。ホーム上にデッキを設置するパターン（図5 構成例3）は、ホームへ向かう人は滞留空間を介さずホームに行くことが可能であり、またデッキ上からホームの視認性が高まることで目的のホームまで円滑な移動が可能となる。また移動を主体としたデッキだけでなく、デッキと滞留空間がともなったパターン（図5 構成例4）は、滞留空間をうまく設置することで現状の滞留空間に比べ、より広い滞留空間を作り出すことができる。今日、デッキが設置されている駅の多くは橋上駅であるが、地上駅においても、交通空間・滞留空間・ホームにまでデッキを貫くパターン（図5 構成例5）はホームに向かう際に滞留空間を介すことなく移動可能であり、またその駅に不慣れな人でもデッキは見つけやすく、デッキに上ることで各空間への円滑な移動が可能となる。

このようにデッキの様々な機能要素への視点場としての機能、またデッキによる歩行空間と滞留空間の分離、さらにデッキによる各空間への誘導性などの様々な特性をいかすことで駅空間の効率的整備が可能となる。

4. おわりに

デッキ設置駅の現状の問題を指摘するとともに、デッキ上からの視認性の確保、デッキによる歩行空間と滞留空間の分離といった特性を生かした空間構成を見つけることが出来た。今後の課題として、デッキ上の移動距離や視認性など定量的な評価を行うことである。

（参考文献）

- 瀧沢真憲、鈴木彰、星楚正明、酒井重成「駅前ペDESTリアンデッキに関する基礎的研究、土木学会第51回年次学術講演集 - 145
 久須見健一、金利昭、山形耕一「駅前ペDESTリアンデッキの形態分類と特徴、土木学会第50回年次学術講演集 - 131
 鈴木彰、星楚正明「駅前ペDESTリアンデッキの現状と傾向、土木学会第53回年次学術講演集 - 229

図4. 平面的構成例（街路パターン）×（前面+サイド商業施設）×（ループ型デッキ）

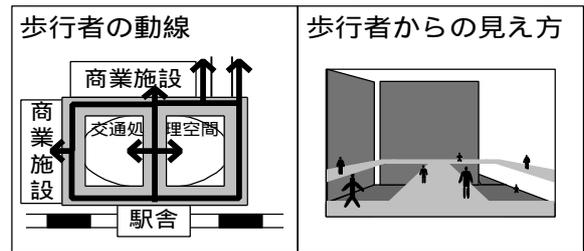


図5. 立体的構成例

